

京都大学	博士（文学）	氏名	八 歙 加 容 子
論文題目	ホームレスの対抗的公共圏の可能性の検討 ——ストリート・ペーパーを事例として		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、ホームレスの人々が路上で販売する雑誌であるストリート・ペーパーに焦点をあてて、どのようにホームレスの人々と市民とが、雑誌の販売を媒介として出会い、その出会いが市民の意識を変容させ、両者が立場を超えて新たな社会構想の芽となるアイデアを共有しうるのかについて、対抗的公共圏という概念を用いて、考察するものである。</p> <p>これまでのホームレス研究では、ホームレスは怠け者であるという主流派社会が持つイメージに抗うように、ホームレスは「抵抗の主体」、もしくは「包摂の客体」として描かれてきた。しかし本研究では、そのような研究枠組み自体が、意図せずにホームレスの人々を自分たちとは異なる〈他者〉であるとする視点を再生産してきたと主張する。というのも、「抵抗の主体」としてのホームレス像は主体性や抵抗を強調するあまり、自己責任論に絡め取られてしまう可能性があり、「包摂の客体」としてのホームレス像では、当事者の持つ行為主体性が後景化することで、当事者を単なる救済の対象とみなしてしまうからである。</p> <p>そのため本論文では、問いの焦点を主流派社会の方に移し、ホームレスの人々が同じ社会の市民であることにはいかに主流派社会の方が気づき、意識変容できるのかを問いとして設定した。非正規雇用が増え、未婚率が高まるなかで、従来型の雇用・家族システムが縮んで小さくなるという、包摂する側の主流派社会のリスクは増大している。そのなかで、主流派社会の側が、ホームレスの人々の苦境を自らの問題ととらえ、生の安定性が不平等に配分されていることに気づき、オルタナティブな社会を対等な市民としてともに構想していく必要がある。それはいかにして可能なのかを、本論文では、参与観察、聞き取り調査、紙面分析によって、探っていく。</p> <p>第I部では、ホームレスの人々が置かれている状況を把握するため、福祉施策と、マスメディアにおけるホームレスの表象を確認した。第1章では、EU、米国、日本の福祉国家の変容と、ホームレスの人々を対象とした包摂策の変遷を見た。経済危機とポスト産業化が進む中で福祉国家が揺らぎ、福祉レジームの別を超えて、新自由主義の影響がホームレスを対象とした福祉政策にも及んでいた。</p> <p>第2章では、日本において主流派社会がもつホームレスの人々へのイメージがどのような変遷を遂げてきたのかを知るために、『朝日新聞』におけるホームレスの表象を分析した。結果、ホームレスの表象には、「事件の被害者・加害者」「公共空間の占</p>			

抛者」「被支援者」といったカテゴリー化に基づく〈他者化〉が見られた。その〈他者化〉の様相は、失業が急増し雇用状態が不安定化しはじめた2000年代初頭においても継続していた。その後、数年遅れてホームレスの人々への共感を示すような特徴が見られるようになった。

第Ⅱ部では、日本のストリート・ペーパーである『ビッグイシュー日本版』に焦点を絞り、紙面の言説分析を行った。第3章においては、まず本論文の対象であるストリート・ペーパーが、アメリカにおいてどのような経緯で誕生し世界中に広がっていったのか、各国の状況をまとめ、先行研究について検討した。結果、海外のストリート・ペーパーは、当該社会の人々の意識やストリート・ペーパー関係者の考え方の影響を受け、対抗性と公共性のバランスが各紙・誌によって異なることが明らかとなった。また先行研究においては、ストリート・ペーパーの言説と販売場面を中心とした日常的実践をともに検討したものはなく、本論文ではその両者を分析し、考察することを確認した。

第4章では、『ビッグイシュー日本版』を対象に、国内のホームレスの人々のライフストーリーの紹介記事と、読者投稿欄を合わせて分析することで、紙面上の言説レベルでどのように対抗的なアイデアが生成・共有されてきたのかを捉えた。結果、ホームレスを生む社会構造を描き、販売者の行為主体性に着目した記事は効果的に読者に届いていたが、現状の福祉施策や就労支援策への疑念やオルタナティブな自立観は、読者にはうまく受け入れられていなかったことが明らかとなった。

第5章では、同誌に掲載された、欧米のストリート・ペーパー販売者のライフストーリーの紹介記事を分析することで、ホームレスの人々がどのような自立観を語り、それが対抗的公共圏の生成においてどのような意味をもちうるのかを分析した。海外の販売者の紹介記事でも、第4章で検討した日本の販売者と同様に、ホームレスを生む社会構造や販売者の行為主体性が描かれていた。とりわけ自らの「傷つきやすさ」に回答してくれるような、ケアの倫理が織り込まれた関係性が描かれていることがわかった。

第Ⅲ部では、関係者への聞き取りと参与観察により、ストリート・ペーパーを媒介にどのような日常的実践が行われ、それがどのようにホームレスの人々と市民との関係性を構築・変容させることになったのかを考察した。第6章では、市民がストリート・ペーパーに、読者やスタッフとして関わるようになった契機を、50人への聞き取り調査から探った。結果、市民にとって、公共空間での雑誌売買を通じて販売者と出会い、彼らの語るライフストーリーに反映された社会構造のいびつさと自らも抱える生の被傷性に気づくことが、活動に深く関わる契機になっていたことがわかった。

第7章では、販売者がいったん就労自立したにも関わらず、また『ビッグイシュー』販売の仕事に戻ってくる「出戻り」という行為によって、同誌の製作・運営を行う組

組織が想定していた包摂策が変容していく過程を取り上げた。ここから、自らの考える包摂策を変容させられるか否かに、ホームレス支援の組織が対抗性を保持しながら活動を続けていけるかがかかっていることを確認した。

第8章では、販売者を中心に行われているクラブ活動に焦点を当てて、ホームレスの人々と市民とがともに余暇を楽しむことの中に見られる対抗性について考察した。結果、労働者／失業者ともに自己資本を高め続けることを要請される新自由主義的なポスト産業化社会だからこそ、ホームレスの人々と市民とが敵味方関係なく応援し合うフットサルの方が、競争原理とは異なるルールが適用された一種のアジールとなっていることを確認した。

第9章では、販売者と市民との間に関係性が築かれ、そこから新しい社会構想が立ち上がっていく過程を検討した。市民は、ホームレスの人々と雑誌販売を通して出会い、彼らのライフストーリーに刻印された社会構造のいびつさや、自分自身の被傷性に気づくことで、彼らの問題は自分たちの問題であると考えられるようになる。そしてホームレスになっても、理由が問われずにその被傷性に応答され、生き延びることができることを目の当たりにすることで、市民も社会への信頼を取り戻していった。そこから、ホームレスの人々をいかに矯正して社会へ包摂するかではなく、主流派社会のひずみを修正していかにもに生き延びることができるかを、考えるようになる。そこに、近代的主体を軸とした社会とは別様の新たな社会構想の芽が垣間見られた。

結論において本論は、どのような施策、規範や表象が、ホームレスの人々を〈他者〉として構築しているのかに、主流派社会が気づくことから、新たな社会構想が生まれうることを確認した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ホームレスの人々と市民との接触場面に焦点を当て、その接触を契機に市民社会がより包摂的なものへと変容するに至る道程を探った、優れた社会学的論考である。ホームレスの人々の声を反映させた紙面づくりをしている雑誌を、ホームレスの人々自身が路上で販売し、生計手段とする仕組みのストリート・ペーパー『ビッグイシュー日本版』を対象にした本論文は、雑誌紙面の次元と、公共空間における雑誌の販売場面を通じた実際の接触の次元において、市民が意識変容に至る過程を精密に記述した、貴重なモノグラフ的論考でもある。

日本における社会学のホームレス研究は、1960年代は、彼らを逸脱しているとみなす改良主義的な社会病理学的パラダイムによって支配されていたが、1980年代以降はそれを批判する形で、彼らを「抵抗の主体」とする見方が主流となった。一方、2000年代以降は、特に社会福祉学や社会政策学において、彼らを「包摂の客体」とし、いかに支援するかを論じる研究が盛んになった。本論文では、このようにホームレスの人々を「抵抗の主体」および「包摂の客体」とする見方のいずれも、彼らを「我々」とは異なる存在として「他者化」してしまう恐れがあると主張する。そして「他者化」を脱するために、市民の側がホームレスの人々を「我々」と同じ市民だとみなし、構造的な問題に気づいて協働し、新たな社会構想を共有することが必要だとし、市民がそのような変容に至る過程を捉えている。

本論文の社会学的意義は、以下の3点にまとめられる。第一に、従来のホームレス研究において焦点を当てられてきたのはホームレス当事者だったのに対して、本論文では彼らを取りまく市民の側を対象にし、その変容を捉えたことである。これまでの研究は、ホームレスを差別し排除する主流派社会のまなざしは問題としても、批判にとどまり、そのようなまなざしがいかに排除を生まない、より包摂的なものに変容しうるのかについては無頓着であった。しかしホームレスが社会から排除された人々なのであれば、ホームレスの人自身よりも、むしろ排除する側の社会のあり方を問題にする必要がある。本論文では、『ビッグイシュー日本版』を媒介にして、市民が雑誌を販売するホームレスの人々と、雑誌の購入を通して関係性を紡ぎ、彼らの声を届ける紙面を購読することを通して、意識を変容させていくさまを検討している。特に重要なのは両者の出会い方で、支援の対象としてではなく、都市の路上など公共空間で雑誌の購入を通してホームレスの人々と出会うことで、支援-被支援の非対称的な関係性を乗り越え、市民は彼らを自分たちと同等な市民として認識するようになると、本論文は主張する。そして市民の側が社会の構造的不正義とそこで生きる自らの弱さに気づき、ともに新たな社会構想を共有するようになる過程を捉えている。

本論文の第二の意義は、ストリート・ペーパーを対象として、そのユニークなありようを詳細に描き出した民族誌的意義である。ホームレスの人々が、彼らの声を届けるべく独自に製作された雑誌の販売を公共空間において行い、その収益を生計費とする仕組みのストリート・ペーパーは、世界各地の都市に見られる。これは、ホームレスの人々を福祉制

度につなげるのではなく、新たな仕事を創出することで「自立」を後押しする、ユニークなホームレス支援の形態である。またこれは、都市の路上で自らの脆弱性を露わにして雑誌販売を行うことで、ホームレスの人々と市民との相互作用を促す、市民にもっとも広く知られたアクセスのしやすいホームレス支援となっている。さらにこれは、ホームレスの人々の声を市民に届ける紙面づくりを行う独自メディアともいえる。しかしこのストリート・ペーパーの都市社会学的なありよう、および困窮者支援として、メディアとしてのユニークなありようを捉えた研究は、国内外においても数えるほどしかなかった。本論文は、『ビッグイシュー日本版』を中心に、世界各地のストリート・ペーパーを広く対象として、紙面、販売の場面、および販売者を中心とした余暇活動まで含めて、その独自のシステムとそれととりまく相互作用を子細に描き出すものである。

本論文の第三の意義は、ポスト産業社会におけるホームレスについて、その実態と政策の特徴の変遷を、他の先進国の状況も含めて統一的に把握している点である。経済危機と新自由主義の進展のなかで、従来人々を社会に包摂していた仕事や家族の形態が不安定化し、それを前提に確立された福祉国家がゆらぐなか、不安定な生を営む人が増加しているのは、日本だけではなく、アメリカ、EUなどにも共通して見られる現象である。本論文では、1980年代以降の先進諸国で共通して見られる構造の変化と福祉国家の変容、そのもとで困窮する層の存在を、マクロな視点から統一的にとらえ、共通するその特徴の変遷を追っている。そしてそれらの変遷にともなって、ホームレスに対するメディアの表象と人々の意識が変化していることを、実証的に描き出すことに成功している。

とはいえ、本論文に問題がないわけではない。本論文の鍵となっている対抗的公共圏の概念について、その定義や理論的意義を、事例に即してより彫琢できた可能性がある。また、市民の変容をとらえることが目的となっているが、本論文で調査対象になっている市民が、そもそも『ビッグイシュー』に親和的な人々に偏ってしまっているという限界の認識が不十分である。さらに、他国のホームレスやストリート・ペーパーの状況がとりあげられているが、日本とそれらとの比較を、共通点だけではなく相違点を整理することもできた点が指摘できる。しかしながらこれらの点は、本論文の価値を大きく損なうものではなく、今後の研究の進展の中で十分に解決できる問題である。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2023年1月26日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。